

高大接続改革における入学者選抜

—新しい入学層を評価する高大接続入試—

大久保 貢, 中切 正人 (福井大学)

高大接続改革の折、高校教育では課題研究の実践により培った探究力を身に付けた生徒を育てている。これらの生徒は大学側にとって高大接続改革以前には見られなかった新しい入学層である。この新しい入学層を評価する入学者選抜として、探究力を評価するために開発したルーブリックを用いて多面的に評価する高大接続入試を設計し平成 29 年度入試に導入した。この入試入学生の入学後の追跡調査を行ったところ、これまでの一般入試や推薦入試入学生より意欲的な入学生であることが分かった。高校時代に探究力を身に付けた新しい入学層を評価する高大接続入試は、現在の入試改革の有効な参考事例として意義のある入学者選抜と考える。

キーワード：高大接続改革, 高大接続入試, 課題研究, ルーブリック, 多面的評価

1 はじめに

主な入学年齢である 18 歳人口が減少するなか、現在の大学における募集人員を維持すれば学力の低下は必然である。即ち、現状の学力を維持するためには、これまでと異なる新たな入学層を獲得することが喫緊の課題である。

一方、高大接続改革の折、現在の高校教育では探究的な学びへの変革として課題研究を実践している。そして、この実践により培った探究力（問題解決能力、論理的思考力、創造性、知的好奇心、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力など）を身に付け、これまでの生徒と違った新しい生徒を育成している。これらの生徒は大学側にとってこれまでとは異なった新しい入学層であり、これらの入学層を評価する入学者選抜の検討が求められている。

このような観点から筆者らはこれまでに探究力を評価するルーブリックを開発し、それを用いて学部アドミッション・ポリシーに沿った高大接続入試を設計し平成 29 年度入試に導入した。

2 高大接続入試の設計

福井大学国際地域学部では高校教育の探究的な学びへの変革を受けて「求める学生像」、「入学者選抜方針」を踏まえ高大接続入試の設計を行った。

2.1 国際地域学部の入学者選抜の基本方針

国際地域学部の「求める学生像」及び「入学者選抜の基本方針」及び「入学者選抜と募集人員」を下記に示した。

「求める学生像」は次の 3 点である。

- ① 地域から国際社会にまで起こっている複雑な諸問題について関心をもち、それについての探求を深

め課題解決に向けて主体的に取り組もうとする意欲のある者

- ② 課題研究と解決に向けて、必要な専門的な分野の学習を学ぶ意欲をもつとともに、問題解決の方法や他の人と共同で実践的に取り組んでいくことに積極性のある者
- ③ 多文化なグローバル社会の中で活躍できるコミュニケーション能力を身につけることに意欲をもち、他の人との対話を通じて、活動を広げ深めようとする者

また、「入学者選抜（高大接続入試）の基本方針」は次のとおりである。

- ① 大学入試センター試験を免除し、第一次選考では、高校での取り組みやその成果に関するレポート等により、取り組みの内容と文章力及び自己アピール力等を判定する。さらに、提出された調査書等に基づき基礎的学力の判定を行う。最終選考では、取り組みに対するプレゼンテーション及び面接により、国際・地域社会の諸課題に取り組む意欲・資質・適性等を評価する。

また「入学者選抜の募集人員」は表 1 のとおりである。

表 1 入学者選抜の募集人員

年度入試	高大接続入試	一般入試 前期日程	一般入試 後期日程	推薦入試 II
29	若干名	35 名	15 名	10 名
30	若干名	35 名	15 名	10 名
31	5 名	32 名	13 名	10 名

2.2. 高校時代の取り組みと成果に関するレポート

高校時代の取り組みやその成果に関するレポートは、大学での学びや社会活動に繋がるような高校時代の取り組みとその成果について具体的に800字程度で作成し、取り組みを証明する資料があれば添付し資料リストと調査書を提出させた。高校時代の取り組み内容と具体的例は、高大接続入試を設計する時に本入試に関わる委員により作成した。取り組み内容と具体例を表2に示した。

2.3 高大接続入試における多面的評価手法

高校生の学びの深まりを把握するために、ルーブリックによる評価、パフォーマンス評価、ポートフォリオ評価の多様な評価方法がある。しかし、一般的には入学者選抜に関するこれらの評価手法の知見や方法の蓄積が十分でない状況である。また入学者選抜での多面的な評価方法の説明責任を確保するためには、アドミッション・ポリシーに基づく多面的な評価の信頼性・妥当性に着目すべきである。そのためには、高校関係者とも協力して具体例を蓄積し共有するとともに評価基準・方法の信頼性・妥当性を検証した評価手法を用いなければならない。

そこで、本学ではこれまでに高校関係者と協働で探究力に対するルーブリック評価を開発し、評価基準・方法の信頼性・妥当性を検証している(大久保, 2018)。そのルーブリックの一部を表3に示した。ここでは創力を構成する4つの力について示した。

表2 高校時代の取り組み内容と具体例

高校時代の取り組み内容	具体的例
高校の授業等での取り組み	○ 高校の授業等における課題探究活動 ○ 指導的役割を担った高校での活動 など。
大学と連携した事業への参加及び取り組み	○ 高校と大学とが連携した課題探究活動への参加 など。
異文化交流及び体験、国際的観点からの取り組み	○ 海外留学や海外研修の体験 ○ 国際交流事業への参加 ○ 語学力(英語力)向上の取り組み(資格取得等)など。
関心や興味を持ったテーマに関する自由研究や社会活動の自発的な取り組み	○ 地域での社会活動の成果 ○ ボランティア活動の参加とその活動 ○ 授業外での課題探求活動 など。
社会的に評価を得ているその他の活動	○ 研究や創作発表などの成果や評価 など。

表3 開発したルーブリックの一部

評価対象		S(4)	A(3)	B(2)	C(1)	
創力	実行力	活動を制御する力	規則性を理解し、新しい解決方法を探るなどの探究的活動を試みる。	繰り返し作業に組み、規則性について考えている。	積極的に課題に取り組み、新しい課題にも挑戦している。	指示された課題を実行している。
	修正力	障害を克服する力	よりよい結果になるように工夫して活動を前に進めている。	原因克服のため試行錯誤しながらも、活動を前に進めている。	原因を克服して活動を進めようとするが、他をまねたりしている。	活動が思い通りに進まず、その原因がわからない。
	独創力	挑戦する力	新しい切り口で事象をとらえて、説明している。	与えられた切り口とは違う切り口で課題解決に取り組んでいる。	与えられた切り口で、事象の理解をしている。	指示された課題にか関心が向かない。
	企画力	経験を一般化する力	得られた結果を一般化して理解している。	得られた結果を概習事項以外の学習・生活面と関連づけている。	得られた結果を概習事項などに関連づけている。	行った課題の結果しかまとめられない。

表 4 最終選考におけるプレゼンテーション用ルーブリックの一部

評価項目	評点	S (10~9)	A (8~7)	B (6~4)	C (3~0)
準備と構成	/10	必要なポイントを適切に絞り、よりよく伝わるように構成を工夫している。	必要なことを考慮されており、伝えたい内容に沿った構成である。	伝えるべきことを考察し、取り込んだ順番に配列している。	行ったことをまとめているが、伝えたいことがまとまっていない。
発表の独創性	/10	他に見られない工夫があり、テーマの本質に迫る内容になっている。	自らの工夫などを加味した内容になっている。	与えられた形式や情報に従った内容になっている。	何かを模倣した内容で独創性が乏しい内容になっている。
発表の信頼性	/10	すべての内容が正確に論理的になっている。	すべての内容に裏付けを示している。	おおむね正確であるが、事実の誤認などがある。	間違いがあるなど内容が十分に整理されていない。
発表の態度	/10	はっきりした声で、身振りを交え、聴衆の反応を見ながら発表している。	はっきりした声で、身振りを交えながら聴衆に向かって発表している。	はっきりした声で、聴衆に語りかけて発表している。	台本を棒読みし、聴衆に向かって発表していない。

最終選考のプレゼンテーションでは表 3 に示したルーブリックを基に学部教員とアドミッションセンター教員によりプレゼンテーション用ルーブリックを平成 29 年に考案した。このルーブリックでは「準備と構成」、「発表の独創性」、「発表の信頼性」、「取り組みへの評価」、「発表の態度」の評価項目を考えた。その一部を表 4 に示した。

表 5 志願及び合格状況 () の数字は女子で内数

年度入試	募集人員	志願者数	第 1 次選考合格者数	最終選考合格者数
29	若干名	15(14)	6(6)	3(3)
30	若干名	21(15)	6(6)	3(3)
31	5 名	10 (8)	10(8)	5(5)

3. 高大接続入試の実施結果

3.1 入試広報

平成 29 年度入試から導入した高大接続入試は本学では初めて導入した入試であるため、入試広報用のチラシを作成して課題探究型の先進的実践活動を実施している県内外の高校 30 校を訪問して入試広報を行った。特に、福井大学教育学部が開催した高大連携 福井大学ラウンドテーブル¹⁾(地域・世代・分野を超えて、高校生、大学生、高校教員、大学教職員が集い、小グループでの実践交流を通じて、新しい世代の学びを支えるコミュニティの展望を探る取組)に参加した山梨県、静岡県、兵庫県、岡山県の高校を訪問して入試広報を行った。

3.2 志願状況及び合格状況

平成 29 年度入試から平成 31 年度入試の志願状況及び合格状況を表 5 に示した。

志願者の高校種別における普通科の割合は、平成 29 年度入試：60%、平成 30 年度入試：76%、平成 31 年度入試：80%と年々増加傾向にある。これは平成 26 年の中教審答申(2014)、平成 27 年の高大接続改革実行プラン(2015)の発表により全国の普通科高校では高校教育の質保証のため課題研究を実践し、主体的・協働的な学びの推進が徐々に始まっていることを示している。また 3 年連続で最終合格者が全員女子であることに関して、高校教員に質問したところ今の高校教育では男子生徒より女子生徒の方が探究した結果を相手に丁寧に伝えようとする力が強いとの指摘を受けた。また、本学においてプレゼンテーションを課したある学部の AO 入試では最終合格者の女子の比率が高い傾向であることも上記の理由の可能性が考えられる。

3.3 高校時代に取り組んだテーマ内容

平成 29 年度入試及び平成 30 年度入試志願者が高校時代に取り組んだテーマの一例を表 6 に示した。

表6 志願者が高校時代に取り組んだテーマの一例

高校時代に取り組んだテーマ内容
SGH の取り組み (エネルギー教育)、地方創生 ハイスクールなどの取り組み
ニュージーランドへの長期留学経験(約 11 カ月)
3回の海外研修・国際交流事業の参加。特にロシア での海外研修
イスラエルからの高校生との交流を行い、多文化 理解
高校の「地域探究」での「小規模集落の魅力を発見」 の取り組み、福井ラウンドテーブルに参加
アメリカでの語学研修、カフェインに関する SSH の取り組み
英語研究部での取り組み。ディベート大会への参 加
ワールドユース・ミーティングへの参加(海外の 高校生との協働) 国際交流体験発表会
子供の貧困の解決への取り組み。女性が働ける環 境の取り組み

3.4 最終選考(多面的評価)を担当した選考委員の感想

本学ではルーブリックを使った多面的評価による入学者選抜は初めてのため、最終選抜の前に実施方法について説明し選考を行った。最終選考を担当した平成29年度入試及び平成30年度入試の選考委員の感想を下記に示した。

- ・高校時代の実践を評価する入試のため、座学中心の教育しか行っていないため実践的教育が少ない高校にとっては厳しい入試である。一方で、探究的な学びを実践している高校にとってモチベーションがアップする入試だと考える。
- ・プレゼンテーションをルーブリック評価することで選考委員間の評価ずれは非常に小さかった。
- ・ルーブリック評価で評価疲れがあるかと心配したが、活発なプレゼンテーションを聞いてむしろ良い刺激を受けた。
- ・選抜方法としてルーブリックによる評価を用いたため恣意的にならず選考し易かった。

ルーブリックを使った多面的評価による入学者選抜を行った選考委員の感想から評価のずれや評価疲れのコメントは聞かれなかった。

3.5 高大接続入試に対する高校側の感想

高大接続入試を実施後、平成29年度から平成30年度にかけて行った本入試への感想を聞き取りした。そ

の結果を下記に示した。

- ・以前は高校3年2学期になり大学入試が近づくと課題探究の実践を止めて大学入試勉強に切り替えたが、本入試により3年2学期まで実践活動が出来て良かった。
- ・高大接続改革の折、高校教育では「探究的な学び」への転換を図っている。このような時に高校時代の探究的な学びを評価してくれる入試は本当に有難い。
- ・高校の国際コースとしては、このような高校での取り組みを評価してくれる入試は助かる。
- ・大学入学後、この入試で入学した学生の追跡調査結果を知らせて欲しい。入学後、リーダーシップを発揮し活躍して欲しい。
- ・一般的にAO入試は選抜基準が不明確のため志願させるには不安であるが、本入試では公開されたルーブリックを基にした評価基準のため志願し易かった。

以上のように本入試に対する高校側の意見として、現在の高校教育に即した入試と好意的に受け止めていることが分かった。

4 高大接続入試入学生の追跡調査(学業成績及び意識調査及び学部教員への聞き取り調査)

新しい入試を導入する際、その入試入学生の入学後の学業成績及び意識調査及びその入試入学生に対する学部教員への聞き取り調査を行い、常に新しい入試の改善を行う必要がある。

入学後の学業成績の追跡調査(入試別によるGPAの平均値)を図1、図2に示した。

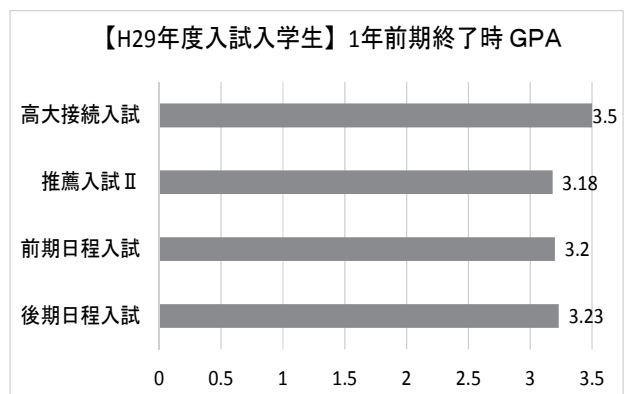


図1 入学後のGPAの平均値(平成29年度入学生)

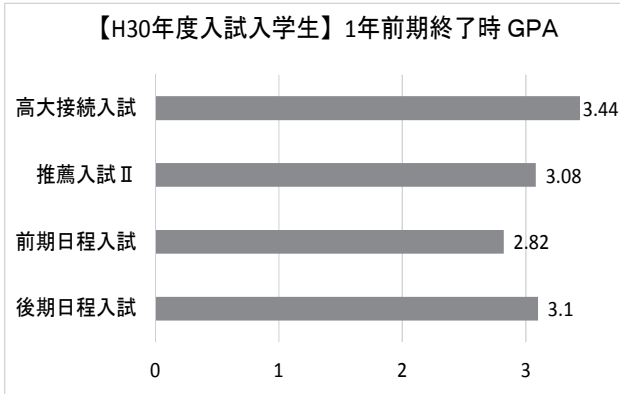
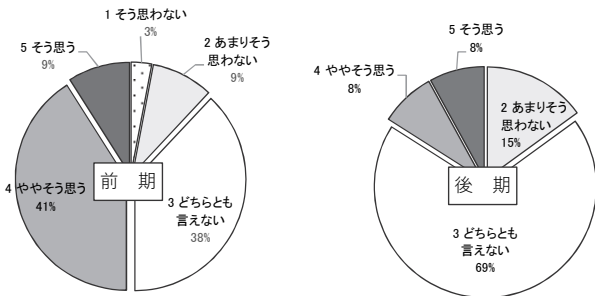
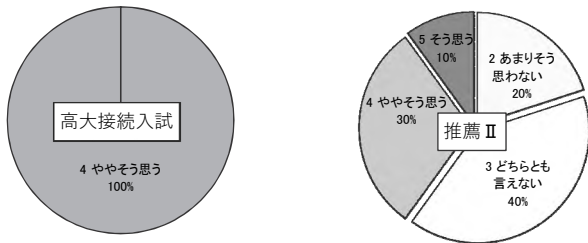
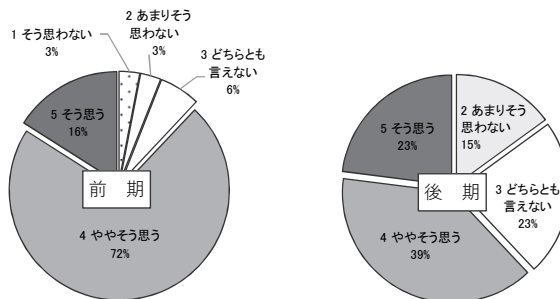
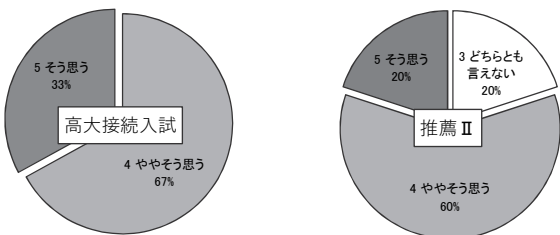


図 2 入学後の GPA の平均値 (平成 30 年度入学生)

全ての科目について努力して勉強している



授業はよく理解できる



ほとんどの授業についていける自信がある

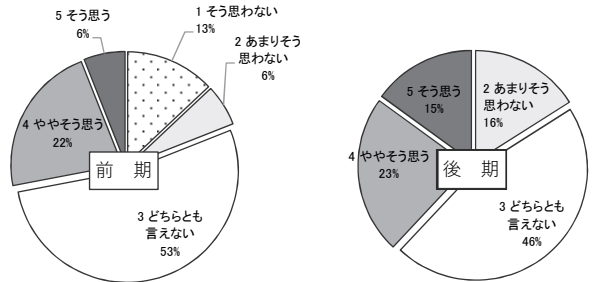
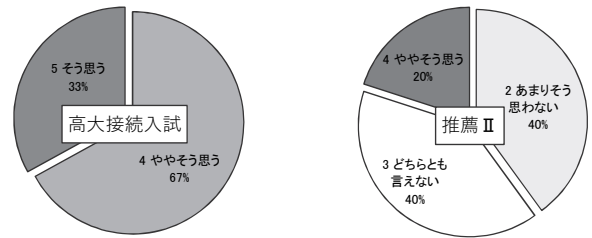


図 3 入学後の意識調査 (平成 29 年度入学生)

(推薦 II：推薦入試 II、前期：一般入試 (前期日程)、後期：一般入試 (後期日程) を示す。)

次に入学 3 カ月後の意識調査を図 3 に示した。この意識調査の回答率は 92.2%であった。

高大接続入試入学生の 1 年次前期の学業成績を他の入試入学生と比較した結果、平成 29 年度高大接続入試入学生及び平成 30 年度高大接続入試入学生の学業成績 (GPA 平均) は他の入試入学生の学業成績よりやや優位であることが分かった。一方、図 3 の入学 3 カ月後の学生の意識調査を行った結果、高大接続入試入学生の勉学に対する意識は他の入試入学生より前向きであることが分かった。また、国際地域学部教員に高大接続入試入学生の印象を聞き取り調査した結果、本入試入学生はプレゼンテーション力及びコミュニケーション力が他の学生より優れ、PBL (課題解決型学習) の授業²⁾では手持ちの原稿に頼るのでなく、自分の言葉で伝わるように話ができる学生がほとんどであることが分かった。以上のように高大接続入試入学生は入学後の大学教育にスムーズに接続して活躍していることが明らかになった。

5 結論

高大接続改革の折、高校では課題研究の実践により探究力を身に付けた生徒を育てている。大学側として、これらの生徒は高大接続改革前には見られなかった新しい入学層である。この新しい入学層を評価するため多面的に評価する入学者選抜として高大接続入試を設

計し平成 29 年度入試に導入した。この入試入学生の追跡調査（入学後の学業成績、意識調査、学部教員の聞き取り調査）を行ったところ、ネガティブな結果は見受けられなかった。高校時代に探究力を身に付けた新しい入学層を評価する高大接続入試は現在の高大接続改革における入試改革の有効な参考事例として意義のある入学者選抜と考える。

補足

高大接続改革による入試改革が検討されているなか、これらの高大接続入試の検証結果は、他学部への高大接続入試の普及へと繋がっている。工学部では令和 2 年度入試に、また教育学部では令和 3 年度入試に高大接続入試の導入が決定した。また国際地域学部では令和 3 年度高大接続入試の募集人員が 5 名から 8 名に増加した。

注

- 1) **高大連携 福井大学ラウンドテーブル**：地域・世代・分野を超えて、高校生、大学生、留学生、高校教員、大学教職員、多様な社会人が集い、ポスターセッション、シンポジウム、小グループでの実践交流を通じて、新しい世代の活動をじっくりと聴き合い、その価値を学び合う。異なる実践に互いに学び合いながら、これからの高校教育・大学教育・職場や地域の課題を共有し、新しい世代の学びを支えるコミュニティの展望を探る。2015 年には全国から約 500 名の参加者があった。
- 2) **国際地域学部の PBL（課題解決型学習）**：社会のリアルな現場から学ぶカリキュラムとして、地域の企業・自治体に足を運び、現実に直面している課題を知り、社員・職員と一緒に調査し、課題解決に取り組んでいる。

謝辞

本研究の一部は科学研究費補助金（基盤研究（C）：課題番号 16K 04462 「大学間共同の高大連携と評価手法の開発研究による高大接続入試への提案」研究代表者：大久保 貢，期間 2016 ～ 2018）の助成を受けました。ここに記し謝意を表します。

参考文献

中央教育審議会答申（2014）. 新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育，大学教育，大学入学者選抜の一体的改革について すべての若者が夢や目標を芽吹かせ未来に花開かせるため
<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf>（2017 年 12 月 2 日）

高大接続改革実行プラン（2015）. : 中央教育審議会答申（2014）を踏まえ高大接続改革を着実に実行する観点から文部科学省として今後取り組むべき重点施策とスケジュールを明示し、集中的な施策展開を図る。

<<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaiei/dai28/siryou4-1.pdf>>（2017 年 12 月 2 日）

大久保貢（2018）. 『『探究力』に対するルーブリック評価の開発』『大学入試研究ジャーナル』 **28**, 53–59.